

# 石を包む石

アンディ・ゴールズワージーの《シープフォールズ（羊囲い）》をめぐる考察

Stone Embracing Stone

— On the *Sheepfolds* Project by Andy Goldsworthy —

● 伊東多佳子／富山大学芸術文化学部

TAKAKO Itoh / The Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words: Environmental Art, Environmental Aesthetics, Andy Goldsworthy

## 要旨

かつて哲学者たちは自然の時間と歴史の時間を異質のものとして説明してきた。自然は循環し繰り返すものであって個体の死は問題にされず、永遠の生命を持つと定義されるのに対して、歴史は人間の生に代表されるように、一回限りのものであって、死すべき運命へと縛り付けられたものであるとされていた。しかし、加速する環境の悪化という現実を目の当たりにすることによって、自然が永遠のものであるという定義自体が見直される必要に迫られている。おそらく、この地球上の自然にはすべて人の手が加わっていて、自然はすでに死へと向かう一回限りの歴史的な時間を持つものに変化している。

環境芸術は自然環境を主題にして自然自体にその素材を求めることで成立してきた。永遠の時間よりも歴史的な時間を持つ死すべき自然のほうがリアリティを持つ今日において、環境芸術も、歴史的な時間性を獲得した自然と共存する道を探る試みが多くなっている。

本論では、英国の環境芸術家アンディ・ゴールズワージー(Andy Goldsworthy 1956-)の作品《シープフォールズ(羊囲い)》(*Sheepfolds*, 1996-2007)をめぐる、最新の環境芸術のありかたとその可能性について考察する。

自然は神の顔を見たために石と化したのではないだろうか。それとも人類の到来を怖れるあまり石になったのだろうか。

『ザイスの弟子たち』ノヴァーリス

## はじめに

ポスト・モダンな物語を失って始まったはずであり、ポスト・モダンの芸術も物語の喪失から始まったはずだった。たとえばかつての風景画の始まりが物語の束縛からの解放と物語の喪失を意味していたように、環境芸術は風景を描くのではなく、風景そのものを主題にして自然自体にその素材を求めることで、より徹底した物語の排除をもくろんでいた。しかし、袋小路を進む現代

芸術が模索する先にあるものが物語(narrative)であるように、環境芸術もまた特定の場所のためにつくる(site-specific)という性格を一步進めて、その場所や風景の歴史に関わり、その場所や風景の物語を語るようになってきている。それは同時に芸術が物語を記憶する装置として機能することを意味している。

本論では、英国の環境芸術家アンディ・ゴールズワージー(Andy Goldsworthy 1956-)の作品《シープフォールズ(羊囲い)》(*Sheepfolds*, 1996-2007)をめぐる、自分自身の物語を語り始めた環境芸術が向かうあらたな方向について探っていきたい。

## 1. シープフォールズ・プロジェクト

アンディ・ゴールズワージーの《シープフォールズ(羊囲い)》は、ノーザン・アーツ・ボード・リージョン<sup>1</sup>が1996年の英国視覚芸術年の主催者に選ばれたことから実現したパブリック・アートのプロジェクトである。ゴールズワージーが当初提出した計画では、カンブリア州に100個の「羊囲い(Sheepfold)」を制作するプロジェクトになるはずだった。しかし、実現のためのさまざまな手続きが複雑で入り組んでいたことと、途中口蹄疫による中断をはさんだために、予定より7年長い11年の歳月を費やして、英国北部の30の地点に全部で46



図版1 カンブリア州の羊のいる風景

個の羊囲いが制作された。作品の制作場所は広大なカンブリア州全域に渡り、後にスコットランドの一部とヨークシャーにまで範囲が拡大されている。

ゴールズワージーは羊囲いの設置場所を選ぶ際に、まったく新しい場所にあらたに羊囲いを制作するのではなく、現存するものの使われることなく放置されていたり、古い地図にその位置が記されているにもかかわらず現存しない羊囲いを取り上げ、それらを修理したり造り直したりして可能な限りかつての羊囲いを甦らせるという方法をとった。そうすることで、それぞれの作品は羊囲いのある、あるいは羊囲いがあったカンブリアの特定の場所やカンブリアの風景と強く結びつき、歴史的な連続性を保ちつつ牧羊の伝統と結びつくことになった。

英国の風景の、とりわけ北部イングランド地方の牧草地のいたるところにみられる空積みの石壁（dry stone wall）<sup>2</sup>は、英国の田園風景を特徴づける重要な要素であると同時に、牧羊の実践に欠かせないものでもある。牧草地の境界を示す空積みの石壁はある種の生きた英国史であり、英国社会が封建制度から脱却していく過程で起きた、酪農と放牧のための土地の囲い込みへと向かう運動の遺産である。16世紀、土地の所有者は羊や牛を育てるために農業を捨てたときに、所有していた土地あるいは共同で用いられていた入会地を個人所有地として囲い込んだ。そのため入会地を利用する権利は地主が土地を囲い込んだときに消失し、場合によっては羊に場所を空けるために住人が追い立てられることもあった。今日見られる空積みの石壁のほとんどは中世以降の囲い込み運動の所産である。なかでも標高の高いところにあるものは、18、19世紀に行われた大規模な囲い込み運動の間に議会が出した法令に基づいて定められた境界を示すものである。そうやって造られてきた石壁は北部イングランドの風景の中を何マイルにもわたってとぎれることなく続いている。



図版2 カンブリア州カスタートン、フェルフット・ロードの石壁の連続

そうした空積みの石壁のところどころに、さまざまな大きさの羊囲いが造られている。それらは乳搾りや羊毛の刈り取りなどの作業の間に羊を集めて留めておいたり、夜間に羊を外敵から守ったりするためのものである。羊囲いには3種類あり、汎用の羊囲い（Sheepfold）のほかに、迷い羊の囲い（Pinfold）と羊洗いのための囲い（Washfold）があり、いずれも中世から続く移動放牧のシステムに由来するものである。

#### a. 羊囲い（Sheepfold）

12世紀から16世紀にわたって、高地を夏場の牧草地として利用するための夏期放牧場がカンブリアに多数作られ、あわせて羊飼いの小屋と羊囲いも建てられた。羊飼いたちは羊の群れを追って、スコットランドのハイランド地方やガロウェイ、あるいはアイルランドから、目的地となる羊毛業の中心工業地帯、ランカシャーやヨークシャーへと旅をしたが、カンブリアはその中継点としてもっとも重要な位置を占めていた。ほとんどの羊囲いは荒れた丘原の端にあり、そこに羊の群れが集められ、赤い色の代赭石を使ったり尾を切り取ったりして羊の身元確認のための印が付けられたり、予防接種や尻の汚れ毛を刈ったりといった一連の作業が行われた。

#### b. 迷い羊の囲い（Pinfold）

長い距離を移動しながら追われていく羊のなかには、しばしば群れから迷い出してしまうものもいた。牧羊のシステムの成熟につれてさまざまなルールが設けられるようになったが、迷い羊の囲いもその一つである。群れから迷い出た羊は飼い主に引き取られるまでの間、この迷い羊の囲いに保護されることになっていた。そうした迷い羊の囲いは一般に共同体の目が届く安全な場所に設置されたので、ほかの羊囲いとはちがって町や村の中に残っている。

#### c. 羊洗いの囲い（Washfold）

羊毛業の発展につれさまざまな工夫がなされてきたが、刈り込みの前に羊を洗うことは600年以上もの間ごく一般的な方法として実践されていた。19世紀の終わりまで、羊毛業者は羊毛を洗って乾かす為の機械を用意していなかったため、羊に生えている毛を洗って乾かしてから刈り込むというやり方がもっとも効率的だったのである。そうした羊を洗うための囲いは小川などの流れや池の近くに設置されていた。ただ生きている羊を洗うのはとても手間のかかる作業であり、費用も多かったので、洗浄によって羊毛の目方が減少することによる損失と、洗浄された羊毛がされていないものにくらべて高価であることによる利益が天秤に掛けられるようになり、手間に見合った利益が出ないことがわかるとしだいに洗われずに刈り込まれる羊毛の量が増え、その結果

羊洗いのための囲いは廃れていった<sup>3</sup>。



図版3 《メルマービーの水溜まりのある羊洗いの囲い》1996年  
(Melmerby Dubbstone Washhold, 1996)

ゴールズワージーは《シープフォールズ》のプロジェクトに3つの種類の羊囲いのすべてが含まれるようにした。作品を設置する候補地は2万5千分の1の縮尺の地図に「羊囲い」と記載されている場所であり、とくに1890年から1905年の間に出版された陸地測量図の初版やその他の古い史料をあたって、はっきりとした形では残っていない羊囲いの遺構が探し出されて、作品にふさわしいものかどうか検討された。牧草地にある羊囲いや羊洗いのための囲いだけではなく、町や村の中心に残された迷い羊の囲いも設置場所とすることで、《シープフォールズ》がカンブリアの田園風景の過去と現在のみならず、田園と都市をもつなぐものとしても機能するようにもくろまれている。新しい場所にあらたな羊囲いを造るのではなく、もともと羊囲いがあった場所に、過去との連続性をはっきりと示すように羊囲いを造るという考え方も、そもそもの羊囲いや空積み石壁の伝統をふまえたものである。再建される羊囲いに用いられる石は採石場から切り出されたばかりの石ではなく、古い石、しかもいまは使われなくなった壁や囲いから取り出される石である。古い壁は壊され、あらたに新しい壁となって息を吹き込まれる。あたかも成長と崩壊が繰り返し循環し続ける自然の生命のように、壁は生き続けてある場所から別の場所へと動くことになる。牧草地の周囲を走り抜ける壁は「風景の中を動く1本の線」<sup>4</sup>であり、時の流れの中で朽ちて傾くと壊されてあらたな場所で造り直され、そうして過去から現在へと時空を貫く線となる。《シープフォールズ》がすべて本職の空積み石壁の職人が制作されているのも、この作品が「風景の社会的な性質に基づく」<sup>5</sup>ものであり、壁造りや牧羊の伝統を通して造られることが作品にとって必須の要素だからである。

カンブリア全域を中心に全部で46個制作された羊囲いは、それぞれが独立した作品であると同時に、全体としてもカンブリアの環境に込められたひとまとまりの作品となっている。羊囲いという古くからある日常的な建造物がゴールズワージーによる造形によってあらたなエネルギーを吹き込まれるのである。

## 2. 牧羊の記憶、あるいは生命の記憶

《シープフォールズ》のプロジェクトの中に、石を包く羊囲いの作品がある。羊追いの石 (Drove Stones) を囲う《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》(Casterton Fellfoot Drove Folds, 1996) と樹の生えた石 (Tree Stones) を囲う《マウントジョイの樹の生えた囲い》(Mountjoy Tree Folds, 2001) である。これらの作品においては、比較的小さな羊囲いの中に、牧草地から取り除かれた一個の大きな石が置かれているが、囲いの中に石を置くというこれらの作品のアイデアは、先行する石棺を用いた作品に由来する。ゴールズワージーは1994年に大英博物館で開催された『タイム・マシーン』展のために5つの作品を制作した。この展覧会は、紀元前2600年から紀元後2世紀までの古代エジプト彫刻の展示室に12人の現代芸術家の作品を並置し、時を超えて作品同士が対話しあうことを試みたものである。《砂の作品》(Sandwork) は、展示室の長さいっぱいにながら広がる蛇行した形の巨大な彫刻で、その土地の素材しか用いないというゴールズワージーの言葉に忠実に、ロンドンの建設現場で用いられているのと同じ30トンの砂でできていた。展覧会全体のなかでもっともダイナミックでフォトジェニックなこの作品は1994年10月22日から25日までの3日間だけ設置された。この巨大な作品と同時に、ゴールズワージーは展示室にある大きな玄武岩の石棺 (Sarcophagus) を用いて、砂と葉と石の作品を制作している。これらの作品では石棺の中に、それぞれ蛇行する砂や折り重ねられてできた葉の造形、あるいは互いに打ち付けて割った小石を並べた渦巻きが安置されている。ゴールズワージーははじめ、石棺を自らの「彫刻のフレーム」として、あるいはまたこわれやすい「彫刻を保護するための便利な容れ物」としか見ていなかった。じっさい、石棺は将来盗掘される時まで死体を守るという機能を持っていた。しかし同時に古代エジプトの言葉では、石棺は 'neb ankh' = 生命の王と呼ばれていた。というのも死体は死後の世界を生きるための乗り物であり、朽ちずに保たれなければならないからである。その一方で、この Sarcophagus という言葉はもともと  $\sigma\rho\alpha\rho\chi$  (sarx) = 「肉体」+  $\phi\alpha\gamma\epsilon\iota\nu$  (phagein) = 「食べる」ことすなわち「肉体を食べるもの」という意味のギリ

リシャ語からきている。これは石が内部に横たえられた体を溶かすと信じられていたことによる。

「肉体を食べる」サルコファーガスのイメージは、カンブリアの海岸線、モーカム湾にほど近いヘイシャムの聖パトリック教会にある「石の墓 (stone grave)」と呼ばれる古い遺跡を彷彿させる。それは、8世紀にその起源を遡ることができると考えられている数個の墓で、ちょうど人間の形に岩が削られているのだが、それはあたかも身体が石化したかのように見える。石によって守られていたはずのかつて生きていた肉体が、死んでなお、完全な死としてその存在を消滅させ、石にその不在を永遠に刻んでいる。この奇妙な生と死の弁証法は、石が不変で不動なものではなく、生命とその死を内に含むものとなりうることを暗示している。



図版4 ヘイシャム、聖パトリック教会の「石の墓」

石棺に閉じこめられている葉の作品は、死を意味する石と、生長と新しい生命を象徴する植物の明らかな対比の中で、死もまた生長の一部であることを受け入れなければならないことを表現している。作品のうちに、誕生、死、再生という自然の無限の循環を反響させている。これに対して、石棺の中に石を置いた作品は、一見すると、内部に配置された石が容れ物としての石との連続性を感じさせ、生命のない、不動のイメージを強めているように思える。しかし、ゴールズワージーが語るように「石棺は単に死の容れ物であるだけでなく、生命の容れ物であり、その中で死から生命が生じる」<sup>6</sup>のであり、石自体が、生命とその死を内に含むものとなる。

## 2-1 牧羊の記憶

《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》(Casterton Fellfoot Drove Folds, 1996) は、カスタートンの丘原のふもとの未舗装の道 (Fellfoot Road) に沿ってつくられた連続する小さな羊囲いである。両側に空積み石壁が何マイルも続くこの道は、羊飼いが羊を

追って通る道であり、ゴールズワージーはもともとあった羊囲いを造り直したり、あらたに羊囲いを造り足したりすることで、4マイルにわたって全部で16個の羊囲いを造った。



図版5 カンブリア州カスタートン、フェルフト・ロード付近の地図 (■が16個の羊囲いの位置を示している)。

それぞれの羊囲いの中には、牧草地から取り除かれた大きな石がひとつずつ置かれている。石のサイズはおおよそ60センチ四方のものから2メートル四方ほどもあるものまであり、かたちもさまざまである。羊囲いによっては、羊の入る余地などまったくないほど石が大きいものもあり、丸石の周りになんとか羊が集うことの可能なものもある。しかしカスタートンに造られた羊囲いは羊を集めるためのものではなく、むしろ羊を閉め出すもの



図版6 《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》1996年 (Casterton Fellfoot Drove Folds, 1996)

であり、実際的な羊囲いというよりは芸術作品としての性格がより強くなっている。

舗装されていない砂利道を歩いていくと、いつまでも続くように見える空積みの石壁に沿って、道の左右に羊囲いがリズムカルに配置されているのに気づく。羊囲いはどれも道の側にはなく、道からは外になる牧草地に造られているので、石壁から道の方にちょうど足場となるような石が三段ほど突き出していれば、それが羊囲いの場所を示すものである。突き出した石の上に立つと、壁の向こうにはるかに広がる牧草地と、放し飼いにされた牛や羊の群れが眺められる。そのまま視線を足下へ向けると、真下にある羊囲いを見ることになる。足場となるように組まれた石は、道の側だけでなく囲いの方にもつきだしているので、石壁をまたいで囲いの側に降りれば、羊囲いの中を歩くこともできる。



図版7 《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》1996年  
(Casterton Fellfoot Drove Folds, 1996)

《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》が表現するのは、羊飼いの日課であり、羊の群れの動きであり、羊を追う道のりである。左右に空積みの石壁の続く羊追いの道を歩く人々は、最初はそこに羊囲いがあることにまったく気づかずに通ってしまいかもしれない。しかし二度目に歩くときには、足場となる石や牧草地の側に出っ張った石壁に気づいて、そこに羊囲いがあることを知るだろう。十分な好奇心があれば、石壁を乗り越え羊囲いの中に入り、丸石の周りを歩いたりするだろうし、子どもたちは丸石の上で遊ぶかもしれない。三度目ともなれば、それからさらに興味を持って、道の左右に次の羊囲いを探しながら羊追いの道を歩くと、その歩みは羊を追って歩くことに固有のリズムを帯びることになる。雨や風、霜、雹、雪とさまざまに変化するカンブリア地方の天候と、訪れた人々がその上を歩き手で触れたり、また、なんとか囲いに入り込んだ羊が体をこすりつけることで羊の毛に含まれているラノリンによる

光沢がつけくわえられたりすることで、囲いの中の丸石は時間が経つにつれてわずかずつすり減り変化していくことになる。しかしそうやって石に刻まれる時間の経過はやがて周囲の景色のように広がっていき、《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》が体現する羊追いのリズムだけでなく、カンブリア全域にある羊囲いを、さらには羊飼いの歴史もその内を含むものとなる。

## 2-2 生命の記憶

アンダーバロウにあるマウントジョイ農場の《樹の生えた囲い》(Mountjoy Tree Folds, 2001)には、南北の方向に向かい合うように二つの羊囲いがある。それぞれの囲いにはひとつずつ大きな丸石が置かれ、それぞれの石の真ん中には、地面を貫く一個の穴が開けられ、その穴にはナナカマドの木が植えられている。二つの大きな丸石はもともと羊囲いの近くにあったものであるし、ナナカマドも近くに生えていた木から取られた苗木である。

石から木が生えるさまは、ただちに生命を強く意識させ、作品そのものが「生命の樹」のように見える。あるいは宇宙樹、世界軸といった古くからのイメージを想起させる「樹の生えた石」は、同時に、あたかもダーウィ



図版8 《マウントジョイの樹の生えた囲い》2001年  
(Mountjoy Tree Folds, 2001)

ンの進化系統樹のように、存在を連鎖させる「生命の樹」のようでもある<sup>7</sup>。

この作品が制作されているさなかの2001年2月に、英国では口蹄疫が大流行し、カンブリアの何百もの農場が危機に巻き込まれることとなり、シープフォールズ・プロジェクトもその影響ですべて延期されることになった。《樹の生えた囲い》への植樹の日には口蹄疫の勃発した2-3日後に予定されていたが、中止された。実際に植樹が行われたのは、口蹄疫が終息した数ヶ月後の12月である。口蹄疫の蔓延のため、病気にかかった動物だけではなく、発生農場から3キロ以内の農場についても全家畜が処分され、淘汰された動物の数は650万から1000万頭にもものぼり、英国国内の家畜飼養頭数の約半数が処分されたといわれている。ゴールズワージーの住むスコットランドのダンフリーズシャーの草原には口蹄疫の蔓延を食い止めるために制限区域を示す白い非常線が引かれた。「家畜を淘汰するための軍人、制服を着た人たち、警察、点滅する光、非常線を張られた地域、火から上る煙の柱、肉の焼ける臭い。制限区域の中に入ることは交戦地帯に侵入することのようだった」<sup>8</sup>と当時の様子をゴールズワージーは記述している。疫病の蔓延を怖れて、あるいはそれを防ぐための大量の殺戮。「そしてその後は、不思議なくらい、空っぽの草原」<sup>9</sup>。口蹄疫がもたらした惨禍は、《樹の生えた囲い》に生長へ

の一段階としての死ではなく、かけがえのない個体の死の意味を付け加えることになった。

この作品に先立って、口蹄疫の発生が始まった頃に制作された《腐敗する羊から集められた毛で穴の周りに作品を作った》(Wool/gathered from/a decaying sheep/worked around a hole, Scotland,22 January 2001)には従来のゴールズワージーの作品には見られなかった、残酷で直截的かつ即物的な死のイメージが現れている。生存競争に敗れ、死んで朽ちていく羊の姿は、「メント・モリ」の暗い伝統の中に位置付けられるものであり、そこに描き出される死は、自然の循環の一段階としての死ではなく一回限りの歴史のなかでの存在としての個体の死を示すものである。

「生き残り生長しようとする闘い」<sup>10</sup>が《樹の生えた囲い》の中心テーマであるとゴールズワージーがいうように、石の中心からまっすぐに立ち上がるナナカマドの樹は、災厄を乗り越えて生き残り、再生を望む強い希望を象徴するものになっている。羊囲いによって大切に抱かれるように守られた石の中心から生長する樹の姿は、見る者に、牧羊業が本来持つ不安定さや困難がもたらす緊張、苦難、苦闘、再生、壊れやすさ、強さなどがさまざまに入り交じった感情を引き起こす。この作品は、とりわけ、口蹄疫の蔓延による大量の羊の死と、その生命を記憶するための記念碑となった<sup>11</sup>。



図版9 《腐敗する羊から集められた毛で穴の周りに作品を作った》2001年  
(Wool/gathered from/a decaying sheep/worked around a hole, Scotland,  
22 January 2001)

### 3. 石の囲いに包まれた石

《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》と《樹の生えた囲い》という二つの作品において、内側に置かれた丸石は、空積みの石壁でできた羊囲いによって守られている。大きな丸石が、見かけ上は堅固で強いものであるにもかかわらず、石の囲いによって保護されているという事実は、じっさいにはそれらが傷つきやすくこわれやすいものであることを暗示している。うやうやしく置かれた丸石は、新石器時代の異教のモニュメントのように、「貴重で、ほとんど崇拜に値するものであるかのよう」<sup>12</sup>見える。その一方で、羊囲いの作品には、羊がそもそも持つキリスト教の象徴的な意味と、石壁によって囲まれた草原の「閉ざされた園」(Hortus Conclusus)というキリスト教的なイメージがつけまとう。そこで守られるのは、伝統的に弱い生き物と考えられてきた羊であり、人間であった。しかし、無機的で生命を持たないはずの石も、地質学の視点から見ると、有史以前に氷河によって膨大な距離を移動してきた歴史を持っている。地球のエネルギーを内包する石もまた、羊と同様に生命を内包するものだとゴールズワージーは捉えている。堅固に見える石ですらこわれやすいものであり、太古からの地球の変化を記憶に留めている

という事実は、風景や自然および地球環境そのものが、長い時間をかけて変化し続け、生命を内包するものであり、守られなければならないということをはっきりと示している。石の囲いは、そこにおいて「生命の器」であり、「記憶の容れ物」となる。ゴールズワージーが羊囲いの中に置いた石は、場所や風景についての記憶を宿し、過去から続く羊飼いの歴史を担うものである。また、その石を包み守るために再建された羊囲いの多くは、長い間、ときに百年以上も放置されていたものであり、現在も利用可能な羊囲いとしてふたたび息を吹き込まれ、羊囲いの歴史と伝統が現在の牧羊と地域の生活に結ばれることにもなる。

ある土地に固有の地理と歴史を作品に含むことは、現代の環境芸術のプロジェクトの多くがそうであるように、さまざまな分野の専門家や多くの人々の協力、共同作業を必要とするものであり、作品自体が社会的な存在となることが前提されている。《シープフォールズ》のプロジェクトは、カンブリアの風景と牧羊の歴史をクローズアップさせることで、広い地域の非常に数多くのコミュニティが作品に参加することを可能にした。ゴールズワージーがプロジェクトについての提案を最初に行った相手は、地方公共団体、芸術教育や振興にかかわる団体、環境、土地所有・経営にかかわる諸機関であったが、それらのそうした団体がプロジェクトに対して好意的な反応を示したので、地域の共同体、地方行政区、農場主、土地所有者などの助けを借りて、カンブリア州全体で《シープフォールズ》のプロジェクトをスムーズに展開することができた。プロジェクトの実現に際してなによりも優先された考え方は、このプロジェクトが人に対しても風景に対しても決して何かを強要するものではないということであった。これは英国の環境芸術がその発生当初から持つ自然観に基づくものであり、芸術もそこで生活する人たちと共に生きていくという意識の表れであった。ゆっくりとしたペースで慎重に、カンブリ



図版 10 マウントジョイ農場の羊囲い

アに住む人々に対して各コミュニティという小さな単位で州の全域にわたる彫刻のプロジェクトのコンセプトが説明され、そうやって人々の支持を確実なものに変えていった。

牧羊業の歴史とカンブリアの伝統が作品の重要な要素であることから、カンブリア州の学校ではこの羊囲いのプロジェクトが芸術、英語、科学技術、歴史、地理学を含むナショナルカリキュラムの教材として用いられるようになった。あわせて、プロジェクトの候補地となったこの地域にある羊囲いの調査も行われ、集められた様々な記録や情報はすべて資料として保存されることになった。こうしてプロジェクトはカンブリアの風景と伝統、牧羊の歴史を現代の彫刻作品を介して緊密に結びつけるものとして機能している。

作品につねに自然の時間を反映させているゴールズワージーが《シープフォールズ》のプロジェクトを通してたどりついたのは、その場所や風景の持つ歴史や物語を語ることであった。かつて哲学者たちは自然の時間と歴史の時間を異質のものとして説明してきた。自然は循環し繰り返すものであって個体の死は問題にされず、永遠の生命を持つと定義されるのに対して、歴史は人間の生に代表されるように、一回限りのものであって死すべき運命へと縛り付けられたものであるとされていた<sup>13</sup>。しかし、加速する環境の悪化という現実を目の当たりにすることによって、自然が永遠のものであるという定義自体が見直される必要にせまられている。おそらく、この地球上の自然にはすべて人の手が加わっていて、自然はすでに死へと向かう一回限りの歴史的な時間を持つものに変化している。

ゴールズワージーが1984年にカンブリアのグライズデイルの森に制作した《壁を散歩に連れて行く》(Taking a Wall for a Walk) という作品がある。これは空積みの石壁が高く伸びた樹々の立ち並ぶ林の間をジグザグに縫うように建てられたものである。しかし2003年の夏にヨーロッパ中を襲った猛暑と干ばつの影響を受けて森全体が乾燥したため樹々が倒れ、一部壁が大きく崩れてしまった。グライズデイルの森の管理はすべて英国森林管理局が行っているが、倒れた樹々を撤去した後壊れた壁を再建するかどうかという判断をゴールズワージーに委ねたところ、実際に作品の現場を見たゴールズワージーの結論は、壊れた壁はそのままにしておくものだった。「散歩する壁」は倒木によって崩れた箇所にある夏の暑い日を刻み込んだ。月日の中で刻まれるさまざまな傷はそのまま石壁の歴史であり、そこから人々は記憶をたどり、物語を紡いでいく。生きて動き変化する壁、すなわちそれ自体が歴史を持ち、物語を紡ぐ装置となる壁のアイディアは、グライズデイルのこの作品にも生き

ている。

環境芸術がこれまでとはちがうやり方で、特定の場所や風景の歴史に関わり、その場所や風景の物語を語り始めているということは、大きな物語の喪失の後に、わたしたちはあらたな自然の物語を語ることを始めなければならないということにちがいない。永遠の自然よりも歴史的な時間をもつ死すべき自然のほうがリアリティを持つ今日において、わたしたち人間は歴史的な時間性を獲得した自然と共存する道をどうにかして探っていかなければいけない。

ゴールズワージーによる《シープフォールズ》のプロジェクトは、芸術による特定の場所との関わり方を人間がそこで実際に生活する自然の歴史的な時間との結びつきの中で示すことによって、歴史的な時間性をもつ自然と、そうした自然に対する人間の関係を知るための一つの指針を示すものになっている。

## 註

※1 ノーザン・アーツ・ボード・リージョン (Northern Arts Board Region) は英国の地域芸術振興のための委員会のひとつで、カンブリア、ノーサンバーランド、ダーラム、タイン・アンド・ウエア、ティーンサイドの各州にまたがるイングランド北部の大部分の地域を扱う組織である。1996年に英国視覚芸術年の主催者に選ばれたことを受けて、北東地域ではゲイツヘッドにアントニー・ゴームリーの《エンジェル・オブ・ザ・ノース》が制作され、北西地域ではカンブリア州全域にわたってアンディ・ゴールズワージーの《シープフォールズ》のプロジェクトが展開された。

※2 空積みの石壁 (dry stone wall) は、セメントやモルタルを使わずに石だけを積み上げていく工法で造られる。単純な工法であるため歴史も古く、最も古い石壁は鉄器時代の頃のものとわれ、中世を通じて盛んに造られていた。現在でも英国北部、とくに湖水地方の周囲やカンブリア地方に多く見られる。使われる石も板のように薄く切り出したものだけではなく、ごろごろとした形の丸石もあり、しばしば古い壊れた壁から取られた石を再利用してあらたに壁が造り直されている。

※3 cf. Andrew Humphries, 'Folds in the Landscape' in Andy Goldsworthy, *Sheepfolds*, Michael Hue-Williams Fine Art, 1996, pp.53-67.

※4 Andy Goldsworthy, *ibid.*, p.12.

※5 *ibid.*, p.14.

※6 'Andy Goldsworthy' in James Putnam and W. Vivian Davies ed. *Time Machine: Ancient Egypt and*

*Contemporary Art*, Iniva and the British Museum, 1994.

※7 ナナカマドの樹は、北欧の伝説では、すべての樹や植物がそこから生じるおおもとの樹であると信じられていた。

※8 Andy Goldsworthy, *Enclosure*, Abrams, 2007, pp.110-111.

※9 *ibid.*.

※10 *ibid.*.

※11 ゴールズワージーは、生命を記憶するための記念碑としての樹の生えた石のイメージを、ニューヨークのユダヤ伝統博物館のための作品《石の庭》2003年 (*Garden of Stones*, 2003) に転用している。ヘブライ語で命を示す数18個の花崗岩の中心に底まで突き抜ける穴を開け、命と再生を象徴する榎の木を植えたこの作品において、《樹の生えた囲い》よりもなお強烈な「生き残るための闘い」が表現されている。苗を植えたのは、ホロコーストからの生存者たちの家族や、その子孫たちであり、作品には大量虐殺にあったユダヤ人の追悼と、新たな生命と未来への希望が込められている。これらの樹は絶対に枯れてはいけないし (《樹の生えた囲い》の北側の丸石に植えられたナナカマドは、ある夏の干ばつの影響で立ち枯れ病にかかってしまったが、「自然」のままに放置されている)、決して忘れてはならない生命のはかなさと尊さを歴史に深く刻みながら、政治的立場を超えて、人間として伝えるものとなっている。

※12 James Putnam 'Introduction' in Andy Goldsworthy, *Enclosure*, 2007, p10.

※13 伊東多佳子「芸術と自然—オスカー・ベッカーの被担性とマルティン・ハイデガーの自然の問題について—」、神林・岩城・原田編『芸術学フォーラム2



図版 11 《石の庭》2003年 (*Garden of Stones*, 2003)  
ニューヨーク、ユダヤ伝統博物館



芸術学の射程』、勁草書房、1995年、74～85ページ。

#### 図版リスト

- 1 カンブリア州の羊のいる風景、2008年9月 撮影：伊東多佳子
- 2 カンブリア州カスタートン、フェルフット・ロードの石壁の連続、2008年9月 撮影：伊東多佳子
- 3 アンディ・ゴールドズワージー（Andy Goldsworthy 1956-）《メルマービーの水溜まりのある羊洗いの囲い》1996年（*Melmerby Dubbstone Washhold*, 1996） 撮影：伊東多佳子
- 4 ヘイシャム、聖パトリック教会の「石の墓」 撮影：伊東多佳子
- 5 カンブリア州カスタートン、フェルフット・ロード付近の地図 in : Andy Goldsworthy *Enclosure*, Abrams, 2007, p.66
- 6 《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》1996年（*Casterton Fellfoot Drove Folds*, 1996） 撮影：伊東多佳子
- 7 《カスタートンの丘原のふもとの羊追いの囲い》1996年（*Casterton Fellfoot Drove Folds*, 1996） 撮影：伊東多佳子
- 8 《マウントジョイの樹の生えた囲い》2001年（*Mounjoy Tree Folds*, 2001）
- 9 《腐敗する羊から集められた毛で穴の周りに作品を作った》2001年（*Wool/ gathered from/ a decaying sheep/ worked around a hole, Scotland, 22 January 2001*） in : Andy Goldsworthy *Enclosure*, Abrams, 2007.
- 10 マウントジョイ農場の羊囲い2008年9月 撮影：伊東多佳子
- 11 《石の庭》2003年（*Garden of Stones*）ニューヨーク、ユダヤ伝統博物館 撮影：伊東多佳子